

楽曲紹介

解説＝一柳富美子

6/20

6/20

ラフマニノフ (1873-1943) ピアノ協奏曲第2番 八短調 Op. 18

社会主義ソ連が自由主義のロシアへ転換して丸27年。体制激変の影響は2010年頃から徐々に音楽学の成果としても反映されるようになり、ソ連時代の解釈はことごとく覆されている。ロシア音楽に関する日本語情報はほぼ全面書き換えが求められよう。

ラフマニノフ(1873-1943)がこの曲に取り組んでいた時期は、永年交際した初恋相手との別れを体験したり、尊敬する文豪トルストイから作品を否定されたりと辛い出来事が重なり、その結果、国外初演まで決まっていたのになかなか完成せず、数年にわたる産みの苦しみを体験した。従来は「1897年の交響曲第1番初演失敗により鬱病に罹り、数年患った後にダーリ博士の催眠療法のお蔭でスランプから脱して曲が完成した」と解説されていたが、近年の研究では、そもそも子供時代から叩かれ慣れていたので交響曲の初演失敗からはすぐに立ち直ったこと、数回しか受けなかった催眠療法はこの作品の完成にはほとんど影響しなかったこと(ダーリ博士を被献呈者としたのは彼の律儀な性格のなせる業である)、この時期は新進気鋭のオペラ指揮者として八面六臂の活躍しており、病的な若者ではなかったこと等が明らかになっている。

1898年夏～1901年4月の作曲。従兄でありラフマニノフのピアノの師でもあったジロティ(1863-1945)がヨーロッパでラフマニノフ作品を大々的に宣伝していたお蔭で、作曲前から内外の注目を集めていた。実際、先に完成した第2・3楽章の披露演奏会(1900年12月15日／露暦12月2日——後述参照)でまず大評判を呼び、ジロティ指揮&作曲者自身の独奏による1901年11月9日の国内全曲

初演だけでなく、ジロティ独奏ニキシュ指揮で行われた1902年1月9日のライブツイヒにおける国外初演も大成功を収め、ラフマニノフの名は一躍欧州中に轟くこととなった。なお、インターネットなどの従来情報では、1900年12月2日はピアノ協奏曲第1番の全曲初演日となっているが、これは誤り。

ピアノが常にオーケストラと絡み合い、独奏部がほとんどないので、ピアノ協奏曲の中でも最難曲と言われている。第1楽章はソナタ形式。鐘の音を模したような印象的なピアノソロの序奏で始まる。情熱的でダイナミックな第1主題とセンチメンタルで官能的な第2主題が好対照をなす。第2楽章は三部形式。抒情的な緩徐楽章で、木管楽器からピアノへと受け継がれる甘い旋律が全楽章を支配する。第3楽章は自由なロンド形式で、ピアノの華麗な走句によるロンド主題と、第1楽章第2主題から派生した異国情緒溢れる美しい副主題とが絶妙に絡み合って華麗な錦模様を織りなし、熱狂のうちに全曲を閉じる。

【作曲年代】 1898～1901年 【初演】 1901年11月9日 モスクワにて作曲者自身がピアノ独奏、アレクサンドル・ジロティの指揮による

【楽器編成】 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦楽5部、独奏ピアノ

チャイコフスキー(1840-1893) 交響曲第5番 木短調 Op. 64

チャイコフスキーの場合、ソ連時代は「大作曲家」のイメージを保つために歴史記述に無理があったことが明らかになっている。例えば、ピアノ協奏曲第1番もヴァイオリン協奏曲も『白鳥の湖』もいろんな理由を並べて初演失敗となっている。今の我々の常識では考えにくい理由ばかりだ。実際には、19世紀ロシア音楽界が1870年代後半まで伊仏独の西欧音楽に席卷されていて、チャイコフスキーは「音楽後進国ロシアの無名の若手」扱いだったのである。当時の新聞雑誌音楽記事の大半はイタリア人オペラ歌手やワグナーらで埋め尽くされていた。従って、何を書いても批判的な評しか出なかったのは、致し方のないことだったのだ。2015年からは新チャイコフスキー全集も刊行開始され、チャイコフスキー作品自体に関しても興味深い事実が次々と公開されている。

この交響曲第5番に関しては、「欧州楽旅で刺激を受けて、1888年の夏にわずか3か月で一気書き上げた」ことが定説になっているが、実際にスケッチを始めたのは1887年秋に遡り、各楽章の主題は既にこの時点で出来上がっていた。

1887年夏、20年来の親友だったコンドラージェフの病氣見舞でチャイコフスキーはアーヘンに滞在中だった。1か月半もの間、最期まで献身的に看病し、この時の体験が、死と正面から取り組み宗教について思索する切っ掛けとなった。我が侬で、醜く衰えていく友を目の当たりにして、繊細なチャイコフスキーは毎日激しく苦悩した。しかし、コンドラージェフの死後、次第にポジティブな感情が目覚め、神の前に人間の運命を肯定的に捉らえようと心境は変化していった。第5番にはこの心の変化が反映されている。初演は1888年11月17日西暦／11月5日露暦、ペテルブルクのチャイコフスキー作品特集演奏会にて本人の指揮で行われた。

第1楽章 冒頭でクラリネットが奏でる悲痛で重苦しい旋律は、「運命の主題」として全曲を支配している。この主題が前年のアーヘンでの体験から生まれたことは間違いない。死を前に苦悶するチャイコフスキー。続いて民俗舞曲的な第1主題と穏やかで歌謡的な第2主題を持つソナタ形式で曲は展開されていく。

第2楽章 「多少の自由さを持つアンダンテ・カンタービレ」という指示通り、ホルンが吹く主旋律はこの上なく甘美で優雅である。中間部では旋律は広がりを見せ、時折例の主題も顔を覗かせるが、再び主部へと回帰し、静寂の中で楽章は終わる。

第3楽章 スケルツォの代わりに配した幻想的なワルツ。旋律の美しさ・軽やかさは例えようもない。だがここでも「運命の主題」は顔を覗かせチャイコフスキーを脅かす。

第4楽章 しかし友の死後によく平穩の境地を獲得した彼は、ここに至って主題を短調から長調へと変容させる。ロンド・ソナタ形式の主部を経て、コーダで明るく堂々と鳴り渡る「運命の主題」は、人間チャイコフスキーが宿命を正面から受け入れる決意をした、その宣言である。

【作曲年代】 1888年 【初演】 1888年11月17日 ペテルブルクにて。作曲家自身の指揮による

【楽器編成】 フルート3 (3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

ひとつやなぎ・ふみこ (音楽学) / ロシア音楽研究の第一人者。国際音楽学会シヨスタコーヴィチ研究班アジア代表委員。ロシアオペラ・声楽・ピアノズムに特に造詣が深い。ロシア音楽研究会主宰。ロシアン・ピアノ・スクールin東京総合監修。研究・執筆、声楽指導、音楽通訳・翻訳・字幕を手掛け、邦訳した大曲だけでも50を超える。